

Title	大学教育とジャーナリスティックな語り
Sub Title	University education and journalistic discourse
Author	石井, 潔(Ishii, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2011
Jtitle	Keio SFC journal Vol.11, No.2 (2011.) ,p.7- 17
JaLC DOI	10.14991/003.00110002-0007
Abstract	1950年代後半以降の大学の急速な拡張に伴って、市井の「知識人」は大学に所属する「専門人」となり、専門分野の知識と我々にとっての「日々のこと=journal」とを結びつける「ジャーナリスティックな語り」は見失われ、自らの狭い専門分野の内部に閉じこもる「専門家主義」が支配的となった。学生たちが自らの「学び」を面白いと感じ、またその社会的意義を理解することができるようになるためには、学生も教員も、このような「専門家主義」を克服し、具体的なイメージを通して、それぞれの専門分野について語る能力を共有しなければならない。
Notes	特集 高等教育 招待論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1102-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

◆特集＊招待論文◆

大学教育と ジャーナリスティックな語り

University Education and Journalistic Discourse

石井 潔

静岡大学理事・副学長（教育・附属学校園担当）

Kiyoshi Ishii

Trustee/Vice President (Educational and Attached Schools Affairs), Shizuoka University

1950年代後半以降の大学の急速な拡張に伴って、市井の「知識人」は大学に所属する「専門人」となり、専門分野の知識と我々にとっての「日々のこと＝journal」とを結びつける「ジャーナリスティックな語り」は見失われ、自らの狭い専門分野の内部に閉じこもる「専門家主義」が支配的となった。学生たちが自らの「学び」を面白いと感じ、またその社会的意義を理解することができるようになるためには、学生も教員も、このような「専門家主義」を克服し、具体的なイメージを通して、それぞれの専門分野について語る能力を共有しなければならない。

With the rapid expansion of universities since the late 1950s, 'intellectuals' in the street have been absorbed into part of university professors as 'specialists'. Due to this fundamental transformation, 'journalistic discourse' which has integrated special knowledge with our 'journal (which etymologically means daily) matters' has given way to 'specialism' focusing on narrowly closed research fields. Both university teachers and students should overcome this kind of 'specialism' and share the ability to explain about their own special fields with concrete images so that students could find their learning interesting and understand its social meaning.

Keywords: 専門家主義、ジャーナリズム、知識人、大衆社会、批評

1 知識人の「大学人化」、科学の「制度化」

アメリカ合衆国における知識人の「大学人化」がもつ社会的意味を分析した著作『最後の知識人たち』で、R. ジャコビー (R. Jacoby) が面白いエピソードを紹介している。1950年代末に30代後半で『フォーチュン』誌の編集者から大学教員に転職したD. ベル (D. Bell) が、コロンビア大学からテニユアを与えられるに際して、以下のようなやり取りが

あったというのである。「大学の連中が『君は博士号を持ってるのか?』と聞いたので、私は『持っていない』と答えた。『何故?』と聞くので、『論文というものを提出したことがないんだ』と言ってやったんだ。」¹

結果的には、彼の著書として最も有名な『イデオロギーの終焉』(1960年)にコロンビア大学が博士号を与える形で学位の問題はクリアされたが、この

エピソードは、この時期のアメリカ合衆国において、高等教育機関としての大学の急速な拡大を背景として（1920年代には5万人であった大学教員数は、1970年代には10倍の50万人に達した）、ベルのように、アカデミックな業績をもち、ジャーナリズムの世界に身を置いていたいわば「市井の知識人」の「大学人化」という現象が起こりつつあったことを示している。ジャコビーの表現を借りれば、「アメリカの知識人たちは、街を離れてキャンパスへ、カフェを離れてカフェテリア＝大学食堂へと立ち去った」のである²。

ベルは、ジャーナリズムの世界から大学の世界に移ったのには4つの理由があると言っている。「6月、7月、8月、9月」、つまり安定した収入を保証された上で、執筆と研究に集中することができる夏期休暇期間である³。大学の量的拡大は、「知識人」の「サラリーマン化＝大学人化」をもたらし、彼／彼女たちにアカデミックな研究にあてる時間とそれを支える経済的基盤を与えた。街角のカフェで、日常なことばで語り合っていた「知識人」たちが、このようにアカデミックなことばが語られる大学のなかにはいわば「取り込まれた」ことによって、「日々のこと＝journal」について批判的・反省的に語ることを使命とする「ジャーナリスティック＝journalistic」な感覚を備えた社会層としての「知識人」の衰退過程がはじまった、これがジャコビーの言う「知識人の最後」のストーリーである。

自然科学の領域について言えば、広重徹が『科学の社会史』他の一連の著作で強調した「科学の制度化」が、以上のような過程に対応するものであると言ってよい⁴。原発事故以来、戦後の原子力行政について語られることも多くなっている周知のことであるが、1956年の原子力委員会や科学技術庁の発足以降、国策としての「科学技術政策」の下で、大量の資金が研究の場に注入される仕組みが作り出されることによって、個人の発意に基づいて「何か意味のある問題の解決をめざす」となみとしての17世紀的イメージの科学の時代は終わりを告げ、与えられた制度的枠組みのなかで、いかに多くの研究費を獲得するかが、個々の研究者にとっての死活

問題となった⁵。第一次世界大戦後から徐々にはじまった「科学の制度化」への道は、マンハッタン計画に象徴される戦時中の軍事研究を経て、1950年代後半には、科学技術研究の現場を広く覆い尽くすようになったのである。

大学の職を蹴って市民運動に身を投じた高木仁三郎のように、日常なことばで、科学について批判的・反省的に語る「知識人」としての使命を妥協なく全うしようとすれば、制度化された研究機関や大学に取り込まれ、「大学人化」することを拒否する覚悟をすら必要とする時代のなかに我々はいる。「原子力村」の住人としての生活がすっかり身につけてしまった研究者たちの、原発事故以来の語り口の耐え難い貧しさを耳にする時、我々は、「日々のできごとについて、批判的に明確なことばで語る」という意味での「ジャーナリスティック」な感覚の重要性を、改めて噛み締めざるをえないのである。

2 「精神なき専門人」と「心情なき享楽人」の不幸な出会い

1960年代末の世界的な学生運動の活発化の一因を、学生数の爆発的な増大による大学の大衆化と旧態依然たる学問的権威主義という意味でのアカデミズムとの間の矛盾に求める議論は、きわめて一般的である。同世代の15パーセント以下の学生のみからなるエリート教育の場であった大学が、人口増と大学進学率の上昇によって、マス化、ユニバーサル化し、同世代の50パーセント以上が大学で学ぶようになると、従来のアカデミックな学問を前提とした教育にはなじまず、自分がなぜ大学で学んでいるのかをよく理解できない、いわば不本意就学の学生が出現するという、M. トロウ (M. Trow) の『高学歴社会の大学』における主張が最も有名であろう⁶。

しかし、エリート意識を欠く大衆として大学にやってくるようになった学生たちを迎えたのは、伝統的な権威主義的エリートではなく、「サラリーマン化＝大学人化」した大学教員たちであった。また「制度化」された研究体制のもとで、絶えず研究成果を出すことを求められている「研究者」たちであっ

た。大学の爆発的な量的拡大によって大衆化したのは、決して学生たちだけではなく、教員の側の大衆化も同時に急速に進んだのである。ただ、エリート意識を失ったという点では、教員の側も全く同様であったが、学生たちとは違って、彼／彼女たちにとっては、大学で何をなすべきかは明確であった。それぞれの専門分野についての論文を細分化した専門ごとに出版されるアカデミックな雑誌に書くこと、そしてその分野について自分がもつ知識を学生たちに伝授することが、「大学人化」した彼／彼女たちに与えられた「職業」だったからである。

ニーチェ、オルテガ等に代表される、19世紀末から20世紀初頭にかけての数々の「大衆社会論」者が一致して指摘しているように、自らの狭い専門分野以外には関心を持つとせず、自分自身の生き方や社会全体の進むべき方向について真剣に考えようとしないう「専門家主義」は、あらゆる事物やできごとを自らにとって面白い面白くないか、快不快かといった平準化された視点からしか見ようとしないう「消費主義」的な態度と並ぶ、大衆社会の典型的な特徴である。専門家主義は、個人的な好悪のみを基準とする消費主義の「浅薄さ」を笑うが、自己満足的な学問的「深さ」の幻想の下で、ひたすら専門分野に立て籠ろうとするそのオタク的閉塞性は、他者に対して開かれた批判的視点を欠くという点では、消費主義と何ら異なるところはない。

渡辺裕によれば、音楽が、貴族のサロンにおけるバックグラウンド・ミュージックから、演奏会場における市民による消費の対象への転換をとげた19世紀を境に、音楽の大衆的消費の主体としての「聴衆」が誕生した。それはまず、感覚的なレベルで音楽を楽しむ「浅い」「ミーハー的な」集団＝「ポピュラー」音楽愛好家という形をとり、それに対抗して、精神的なレベルで音楽を「深く」理解すると称する「クラシック」音楽愛好家の集団が登場する⁷。大衆社会的消費主義は、常にこのように「浅い」消費主体と「深い」消費主体を同時に生み出すのであり（19世紀以降定着したより一般的用語を使えば、後者が「ダンディ」であり、前者が「スノップ」である）、専門家主義とそのオタク的「深さ」もまた、

大衆社会によって生み出されたこのような消費主体の一属性にすぎない。ニーチェの言う「精神なき専門人、心情なき享楽人」は、同じ大衆社会という基盤の上に立つ、同位対立物なのである。

過度の図式化を恐れずに言えば、大学の大衆化の進行に伴って、「精神なき専門人としての大学教員と、心情なき享楽人としての学生のキャンパス上での出会い」とでも言うべき事態が広範囲に生じるようになった。教員の側は、学問の専門的「深さ」に興味を示そうとしない学生にいら立ちを感じ、学生の側は、トロウが言うように、もはや大学進学はエリート的「特権」ないし「権利」ではなく、同世代の多くの若者に課せられた一種の「義務」となっている以上⁸、様々な事柄への興味・関心やキャンパスライフに対するそれぞれの「享楽」の期待はあるとしても、決して「学問への志」をもって大学に来ているわけではないので、自分たちの日常生活や卒業後の職業生活とのつながりが実感できない学問的専門性に、「狭さ」をしか感じないという不幸なずれ違いが、随所に噴出するようになったのである。

1960年代末に多くの大学で起こった学生運動では、エリート主義的な特権体質や非民主的な大学運営、それに軍事研究、産学協同等を通じた帝国主義的支配や資本への隷属などを告発し、「大学解体」や「大学民主化」などのスローガンが掲げられた。このような運動が、上記のような教員と学生とのギャップを埋める上で一定の貢献をしたことは言うまでもない。「誰のために、また何のために学問をするのか」という問いを両者が共有して共に語り合う貴重な機会が与えられたことなかから、専門家主義の枠にとらわれない多くの教育・研究上の成果が得られた（例えば、宇井純『公害言論』はその代表的なもののひとつである）。またその軍事研究、産学協同批判も、拡大しつつあった「科学の体制化」が持つ問題に正しく焦点をあてたものであった。

しかしこの時代の学生運動は、大衆化しつつあった大学が抱える真の問題が、伝統的なエリート主義的権威主義や身分制的特権ではなく、むしろ知識人の「大学人化」や科学の「体制化」を背景とする専門家主義の方であることを正確に認識していたとは

言えない。もちろん大学の小講座制に象徴されるような「封建的」人間関係や理事会を中心とした密室での意思決定などの「前近代的」側面が、多くの学生の怒りを買った事情は十分に理解できるが、そのような「古い」大学の体質を、「大学解体」や「大学民主化」を叫ぶことによって一掃したとしても、専門家主義はまったく無傷で残る。なぜなら、専門家主義はエリート主義とも封建的人間関係とも無縁な、大衆社会とその下にある大衆民主主義の産物だからである。

エリートは、大衆を導かなければならないと信じているので、あらゆる分野の事柄について、評価し、批判し、遠慮なく口出ししようとする。しかし、専門家は自分の専門以外のことについて発言することには消極的であり、また自分の専門について専門外の人から意見を求めようとはしない。この点でエリート主義と専門家主義とは対極にある。また専門家は、得意とする専門分野以外のことについては、他分野の専門家の発言や「世間」の判断に盲従しがちである。そして、社会的に重要な決定を他者の判断に安易に委ねるといふこのような傾向は、まさに大衆民主主義に典型的な特徴なのである。「あなたは何のために学問をしているのか？」といった学生側の真摯な問いかけに真正面から応えることができなかった1960年代末の大学教員は、決して「権威」や「特権」にあぐらをかくエリートではなかった。「そんなことは自分の専門じゃないからわかるはずがない」と、自らの専門家主義に開き直った一大衆としての「大学人」だったのである。

3 「専門的知識」と「日々のこと」の結合

大学教員の側の大衆化がこのように専門家主義という形をとったのに対して、学生の側の大衆化は、トロウが言うように、不本意就学の増大という形で表れた。学生たちの多くは、例えば自然現象に対する純粋な興味やより公正な社会を実現したいという正義感をもって大学にやってくるが、エリート段階の学生とは違って、アカデミックな学問を学ぼうという意味での学習への動機づけをもっているわけではない。天体の運動や昆虫の行動に対する知的興味

は、物理学や生物学を学として極めたいという志向性を必ずしも伴うものではなく、また社会的不平等に対する怒りやその変革への意思と、経済学や政治学の間には少なからぬ距離がある。トロウはこのような学生たちが、「カリキュラムにより大きな柔軟性と直接的な関心に訴えるものを求める」傾向や、「書物や読書中心の授業を少なくさせて実地調査や現時点での直接的経験をつよく求める」傾向をもっていることを指摘し、「義務」として大学進学を選ぶようになったユニバーサル段階の学生たちに対しては、教員の側に「学生をこちらに向かせる」努力が必要であり、それを通じて学生に学問への動機づけを与えなければならぬと主張している⁹。

教員の側から見れば、表面的な興味・関心や直接的経験への希求はあっても、それを科学的研究や学問的探求に結びつけようとしないうような学生たちの姿は、まさに「心情なき享楽人」そのものである。しかし最初から「学問への志」をもって大学に入学して来ていたエリート段階の学生たちへのノスタルジーは、大学教員が自らの専門家主義を克服するには、何の役にも立たない。逆に、ユニバーサル段階にある学生たちの「日々のこと」への興味・関心をそれぞれの学問分野の専門的知識と結びつけるような「ジャーナリスティックな語り」を、ひとり一人の教員が身につけなければ、キャンパスにおける「精神なき専門人」と「心情なき享楽人」との間の不毛なすれ違いを内在的に乗り越える道を切り開くことは不可能なのである。

文筆だけで身を立て、カフェでの自由な議論を交わしていた「知識人」が「大学人化」してキャンパスに去ると同時に、「日々のこと」について批判的・反省的に語る「ジャーナリスティックな語り」も社会から失われたとするジャコビーの知識人論について、E.W. サイド (E.W. Said) は、「大学人化」が必然的に「知識人の最後」を意味するという議論は、結局「旧き良き」時代の、生まれながらの貴族としてのエリート主義的な知識人像へのノスタルジーに過ぎないと言う。一般的に、「大衆社会論」は、大衆社会化を一面的に否定的な過程としてのみ位置づける場合が多いが、もしそうであるとすれば、そこ

からの出口は退行的な貴族主義的過去への回帰しかないことになってしまう。現代における真の問題は、知識人の「大学人化」それ自体ではなく、様々な利害や権力と結びついた専門家やエキスパート、コンサルタントが世界中にあふれかえり、それぞれの「専門性」を売り物に、大衆を誘導し、そそのかすことがそれら現代版「知識人」の主要な「職業」となっていることであると、サイドは主張する¹⁰。

サイドは、友人のチョムスキーから聞いたという次のようなエピソードを紹介している。チョムスキーが言語学の話をする時には、誰でもその分野の専門家として敬意をもって話を聞いてくれるのだが、彼がアメリカの対外政策に批判的な意見を述べようとすると、とたんに対外政策の「エキスパート」がその発言をさえぎろうとするというのである。しかもそれはチョムスキーの議論の個々の論点に反論するという形でなされるのではなく、単にチョムスキーには、その分野について専門家として語る資格がないからというだけの理由によってなのである¹¹。専門家主義は、こうして「日々のこと」についての開かれた議論を封殺し、「エキスパート」の雇い主にとって有利な特定の方向に結論を導こうとする。

このような「専門家主義」に対して、サイドは「アマチュアリズム」を対置する。この場合、「アマチュアリズム」とは、利害や権力によって影響されることなく、自らの幅広い興味・関心に基づいて、専門分野にしばられずに考え、発言することを意味する。このような「アマチュアリズム」の立場から、大衆に対して語りかけることによって、知識人は専門家主義とは一線を画した真の意味での知識人としての役割を果たすことができると彼は言うのである¹²。

大衆が自ら「主体」的に考え、「主体」的に行動することが、「ひと」の意見に流されるという悪い意味での「大衆社会」克服の唯一の道であるとすれば、すべての人々が専門家やエキスパートに盲従することなく、「アマチュア」として振る舞うことが求められる。重要な政治的・社会的決定に対して誰もが責任を持つべきである以上、「専門ではないから私にはわからない」とか「その点については専門

家に任せる」などと安易に発言することは許されないのである。この点では、サイドの「アマチュアリズム」は完全に正しい。「大学人化」した教員たちも、自らの専門に直接関わらない事柄についても、幅広く考え、発言し、行動しなければならないのである。

しかし同時に、「大学人」も含め、多くの知的「専門家」が社会のなかに登場したこと自体は、様々な分野の専門的知識が、より多くの人々に共有される条件が作り出されたという点で、積極的意味をもっていることを忘れてはならない。サイドが言うように、「大学人化」が必然的に専門家主義を生み出すと考えるべきではなく、組織に属する「大学人」として生きていくことを選んだ大学教員のレズン・デートルは、第一義的にはあくまでそれぞれの専門分野における教育・研究なのである。ただ「大学人」が専門家主義に陥らないためには、学生や市民が日常的に抱えている様々な問題や興味・関心、つまり彼／彼女たちにとっての「日々のこと」と自らがもつ専門的知識を結びつけることによって、「大衆社会」の構成員のひとり一人が、「主体」として、より批判的・反省的に考え、行動することができる条件を作り出す責務を負っていることを、常に自覚していなければならない。それは単純に、知識人として大衆を「啓蒙」ということではない。逆に、このようにして専門分野と「日々のこと」を結びつけるという作業を通じて、「大学人」はその専門家主義の限界を越えて「ジャーナリスティックな語り」を獲得することができる。「大学人」が自分自身の専門分野の外で、ただの「アマチュア」としてありとあらゆる問題に関わるだけでは、彼／彼女の専門家主義そのものは手つかずのまま残ることになり、このような自らの専門分野について批判的・反省的に語る能力を育成する機会を失ってしまうのである。

大学における、教員と学生の関係に限って言えば、両者が手を携えることによってはじめて、「日々のこと」と専門分野を結びつけることが可能になり、「精神なき専門人」や「心情なき享楽人」としてではなく、「ジャーナリスティックな語り」を共有す

る社会の「主体」的構成員同士としてキャンパスで向き合うことができるようになる。そして、オタク的学問に閉じこもる教員と面白さや直接的経験ばかりを求める学生の組み合わせという、大学のもつ大衆社会的側面を内在的に克服し、活発な議論と生き生きとした教育・研究の場としてのキャンパスの条件が整うことになるのである。

サイドの「アマチュアリズム」は、専門家主義の「狭さ」や特定の権力や利害への「奉仕」に対する批判としては、確かにすぐれたものである。しかし、知識人が「大学人化」を典型とする「専門職化」の道をたどったことが、社会全体の「知識基盤社会」への移行という点では、必ずしも否定的に評価されるべきものではないこと、またそのような社会的条件の下では、彼／彼女たちが、あくまで専門家としての立場を守りつつ、「専門的知識」と「日々のこと」を結合し、それを通じて大衆社会状況のなかに置かれた社会の個々の構成員が批判的・反省的に考え、行動する力量を形成する過程に参加するという新たな課題を担うことになったことを、サイドは残念ながら十分には認識していない。彼は、ジャコビーのポヘミアン的知識人へのノスタルジーをエリート主義的であると批判するが、一切の専門にしばられない「アマチュア」という概念も同様にエリート主義的、貴族主義的である。「専門職化＝プロ化」の進んだオリンピックの現状を嘆き、ブランドージ会長時代のオリンピックの「アマチュアリズム」にノスタルジーを感じるのと同じ図式がここにはあるのだ。

4 相互「批評」の条件

「知識人」に代わって、「大学人」や「専門家」が支配的な存在となれば、社会についての批判的・反省的な「ジャーナリスティックな語り」も失われると考えている点では、ジャコビーもサイドも一致している。もちろん商業ジャーナリズムはますます隆盛をきわめるであろうが、単なる営利目的の情報の垂れ流しは、権力者や「エキスパート」の見解を無批判に繰り返すことになるだけで、「知識人」が担うべき全体的、客観的、批判的視点をそこに望む

ことはできない。そうなれば、参照すべき確かな基準を失った「大衆」は、そのような画一化された悪しき意味でのジャーナリズムに踊らされ、自ら「主体」的に考え、行動する自由を失ってしまうであろうというわけである。

ジャコビーが「知識人」の「大学人化」の象徴として名前をあげているベルは、このようなネガティブな大衆イメージを前提とする「大衆社会論」を真っ向から批判している。例えば、『イデオロギーの終焉』では、「バラバラに離れて、孤立し、匿名的な」諸個人が、画一化された新聞、映画、ラジオといったマスメディアにさらされることによって作り出されるのが「大衆の世論」だというステレオタイプな大衆イメージがいかに歪曲されたものであるかについて、ベルは次のように言っている。

「諸個人は白紙ではない。彼らは同じ経験に様々な社会的概念を引きあて、異なる反応をもち帰る。彼らは映画を見ているあいだ沈黙し、離ればなれで、孤立し、匿名的であるかもしれぬが、見終わると、その映画について友人と語り合い、意見や評価を交換するのである。彼らはふたたび特定の社会集団の成員となるのだ。家庭で一人夜をすごす数百の、あるいは千の人々がすべておなじ本を読むなら、彼らが『大衆』であるとも言うのであろうか。」¹³

大衆は、ただシャワーを浴びるように受動的に外部の情報を取り込んでいるわけではない。彼らは、自らの家族や友人、その他彼らが所属する様々な社会集団の仲間たちと語り合うことを通じて、マスメディアによって与えられるもののうち、何が受け入れられ何が受け入れられないかを的確に「批評」し、「下から」形成された世論を携えて政治的公共空間に参加していくことができるだけの自発性をもっている。「知識人」を含む、外部からの貴族主義的な介入などなくても十分やっていけるのだ。これがベルの主張である。

「脱工業化社会論」の提唱者として有名なベルにとっては、知的活動の「専門職化」は、社会の構成員のひとり一人が、多かれ少なかれ知識に基づく判断を求められる「知識基盤社会」形成の不可欠の条件のひとつなのであり、なんら否定的に評価される

べきことではない。社会全体の知的水準が飛躍的に高まり、民主的な意思決定システムの下で社会の構成員間の相互「批評」が十分に機能している現状に目を向けず、受動的でコントロールされやすい「大衆」というイメージに固執するのは、時代遅れの貴族的ロマン主義者だけだと彼は言うのである。

確かに、受動的「大衆」とそれを正しい方向へ導く「知識人」という二元論を克服するためには、いわば「大衆」自身が「知識人」となり、その相互「批評」によって、社会全体の進むべき道を指し示すしかない。この点ではベルの主張から学ぶべき点は多い。しかし、「専門職化」した小「知識人」たちのもつ専門的知識が社会に均等に配分され、誰もがそのような知識に基づいた批判的・反省的な観点からの判断を行うことができるような条件は、残念ながら整っているとは言えない。原子力発電についての専門的知識が、産学官の利害と権力が緊密にからんだ「原子力村」と呼ばれるグループによってきわめて偏った形で提供されていたことに典型的に見られるように、商業ジャーナリズムと専門家主義が結びついて世論を誤った方向に誘導する例は、決してめずらしくない。サイドが的確に指摘しているように、「エキスパート」たちが権力や金による支配に積極的に奉仕する醜い姿を、我々はあまりにも多く目にしてきたのである。また、近年のネット上での「批評」的言説の氾濫は、このような「エキスパート」支配の外部での自由な相互「批評」の権利の獲得という点で注目し得るものであるが、「Facebook 革命」から、自分の好き嫌いのみに基づく無責任な罵詈雑言までその内容は多様であり、「専門的知識」との正しい結合の在り方について、なお課題がある。

急激な都市化とその下で花開いた消費文化に象徴される「近代」的生活スタイル（「モダンライフ」）が都市住民の間で次第に一般的なものとなりつつあった1920年代から30年代にかけて、その理論的活動を展開した戸坂潤は、ベル同様、受動的「大衆」像を前提とする「大衆社会論」を厳しく批判し、大衆自身が客観的・科学的知識を獲得することによって、つまり「科学の大衆化」を通じて、歴史の「主体」となる道を探ろうとした。また彼は、文学や映

画などのいわゆる「大衆文化」の受容過程のなかでも、その「面白さ」と不可分に結びついた多様な相互「批評」が展開され、様々な社会的政治的事象やモラルについての評価基準がいわば「下から」形成される点に注目しており、「大衆文化」そのものを受動的「大衆」が「享楽」するだけの低俗なジャンルとしか見ない「大衆社会論」とは一線を画している¹⁴。

しかし同時に戸坂は、富と権力が偏在する資本主義社会においては、専門的知識の所有もまた、絶えず特定の社会層によって独占される傾向にあること、商業ジャーナリズムや文化産業の支配下にある「大衆文化」の領域が、利益優先の「センセーショナルリズム」や単なる「暇つぶし」「退屈しのぎ」としての「享楽」の消費の場に転化する力学の下にあることを正しく指摘する。「大衆社会論」は、「精神なき専門人、心情なき享楽人」といった「大衆社会」のネガティブな側面を貴族主義的社会的没落の必然的帰結と考える点では間違っているが、資本主義社会の下での知識人の専門職化や「大衆文化」が現実にとどのような形態で立ち現れるのかについての現象の記述という点では、少なくともその一面を正確に反映しているのである。

大衆にとっての「日々のこと」と専門的知識を結びつけるためには、またメディアや「大衆文化」を相互「批評」の場とするためには、専門家主義や「センセーショナルリズム」「暇つぶし」「退屈しのぎ」としての文化消費等を克服することが必要であり、またそれを支える様々な制度的枠組に手を加えなければならない。例えば、大学において教員と学生が「ジャーナリスティックな語り」を共有することが専門家主義克服の不可欠な要素であるとすれば、それには政府の「科学技術政策」を背景とした研究業績中心の教員評価・大学評価や研究費配分システム、そしてそれと密接に結びついた大学院段階での「教育者養成」をまったく度外視した極端に「研究者養成」に偏った教育体制の改革による専門家主義の再生産過程の見直しが前提となる。またマスメディアや文化消費の場面で、真の意味での相互「批評」を機能させるためにも、ニュース解説における池上彰

やアニメ・マンガ批評における大塚英志のような専門的知識と「日々のこと」を結びつけるすぐれた媒介者が必要となると同時に、彼／彼女のような存在に持続的に発言の場を保証しうる、巨大資本＝東京電力的スポンサーから自由な「媒体」が確保されなければならない。

5 「ジャーナリスティックな語り」における「イメージ」と「主体」

専門的知識と「日々のこと」を結びつける「ジャーナリスティックな語り」について考える上で、「イメージ＝表象」の果たす役割は重要である。我々は日々の生活の中で、自らをとりまく社会や自然について常に一定のイメージ（「社会観」「歴史観」「自然観」等）をもっており、それらはそれぞれの対象についての我々の「認識」を形成していると同時に、「主体」としての我々が「世界」に対してどのようにコミットすべきかという「実践」的側面をも深く規定している。例えば明治維新から第二次世界大戦までに日本が経験した多くの戦争について、それらが主に「防衛戦争」であったというイメージをもつのかそれとも「侵略戦争」であったというイメージをもつのかは、我々の歴史「認識」を形成するだけでなく、「平和憲法の理念に基づく戦後の平和主義を引き続き守るのかどうか」という我々の現代政治へのコミットメントのあり方をも規定する。そしてこのような「イメージ＝歴史観」は、しばしば論争的となる司馬史観が、彼の幅広い取材と高度経済成長期にあった日本人の日常的経験との彼なりの総合の形であるように、近現代史に関する歴史学的な専門的知識とそれぞれの時代の人々の「日々のこと」とが結びつけられることによって作り出される。

この両者の結合のあり方については、イメージ重視のあまり、歴史学によって明らかにされた歴史的事実を無視する傾向に対する批判や、逆に学問的正確さに拘泥するあまり、イメージや「面白さ」を犠牲にし、人々が歴史に積極的に興味・関心を持ち、またそれを通じて鼓舞され、勇気づけられるといった側面を見ないことに対する批判など様々な立場からの論争がある。司馬史観をめぐるもの以外でも、

井上靖の『蒼き狼』をめぐる『『歴史と文学』論争』、岩波新書『昭和史』をめぐる「昭和史論争」、NHK大河ドラマの時代考証や歴史教科書に関する議論など多くの論争が積み重ねられてきた。しかし、どのような立場をとるにせよ、歴史観一般の意義を否定し、ただ歴史的事実を列挙すればよいと主張するほどイメージのもつ意味を軽視することも、また逆に「元気の出る」「面白い」ストーリーでありさえすれば歴史的事実など一切無視しても構わないと主張するほど極端な「物語主義」を採用すること（もしそうであるとすれば、そもそも「歴史」などにはこだわらず、『スター・ウォーズ』で十分だということになってしまう）も共に不可能である¹⁵。

戸坂が、多数者の認識を科学的認識と結びつける科学の「大衆化」と、科学的正確さを犠牲にして多数者のレベルまで引き下げる科学の「通俗化」とを区別しようとしたように、専門的知識と「日々のこと」との結合は、現実には常にこの「大衆化」と「通俗化」の間で揺れ動いてきた。しかし両者がこのような動的な関係にあることは、その関係性自体が絶えず相互「批評」の対象であり、絶対的な基準に基づく上からの「啓蒙」によって与えられるものではないことを示している。戸坂は、ジャーナリズムが、商業ジャーナリズムとして常に「通俗化」への傾きをもつことを指摘すると同時に、絶対的で普遍的な「本来的なもの」のみを対象にすると称して、移ろいやすい「日常性＝日々のこと」を「ジャーナリスティックなもの」として切り捨てようとするアカデミズムのあり方をも厳しく批判し、「アカデミズムとジャーナリズム」が相互に排除し合うことなく統合されることによって、はじめて大衆は正しい世界観（「社会観」「歴史観」「自然観」等の総体）に到達し、「科学の大衆化」も成し遂げられると主張した。また大衆文化が相互「批評」の場となる上で彼が重視している「面白さ」の問題とも関わるが、我々がひとり一人の「主体」として世界にコミットしていく契機としての「自分」の生成という点では、映画、演劇等も含む広い意味での「文学」も重要な意味をもつと彼は考えており、「科学と文学」の統合も多数者が受動的な「大衆」ではなく、歴史の「主

体」としてふるまうことを可能にする上で不可欠な条件であると考えていた。

このような「アカデミズムとジャーナリズム」「科学と文学」の統合による「ジャーナリスティックな語り」が我々の自然観の変革に大きな役割を果たした例として、小松左京の『日本沈没』をあげることができる¹⁶。1973年に出版され、同じ年に映画化されたこの作品は、1960年代末に学説として定着した「プレートテクトニクス理論」をいち早く取り入れ、この作品を通じて、我々が生活しているこの地球表面が、マントル対流によってゆっくりとした移動を続けるプレートの集合体であり、それらのプレートの相互作用によって地震、火山、断層などの様々な地殻変動が引き起こされているという新たな自然観を、日本人の多くが共有することになった。そしてこのような自然観が広く受け入れられたことによって、1976年の石橋克彦によるプレート理論に基づく東海地震説も急速に普及し、日本における地震防災に関する政策とひとり一人の国民の意識は大転換を遂げた。

地球科学的な専門的知識が、東京の直下型地震や富士山噴火など我々の「日々のこと」としての様々なできごとと結びつけられることによって明確に「イメージ」化され、プレート理論が「大衆」のものになったという点では、『日本沈没』は戸坂の言う「科学の大衆化」の典型例と言ってもよい。また、我々ひとり一人の「主体」としての地震防災へのコミットメントに大きな影響を与えたという点では、特定の自然観を背景とする「文学」のもつ「実践」的機能の重要性を証明することにもなった。さらに映画版の監修者として、竹内均ら地球科学の専門家も積極的に協力を惜しまず（竹内は本人役で出演もし）、このような協力は、彼らにとって、科学の「通俗化」とのぎりぎりの妥協のなかで（例えば現実には起こりえないプレートの沈降速度の設定など）、「ジャーナリスティックな語り」を身につける学習の場ともなった。竹内を東大定年退職後に編集長として迎えて1981年に発刊された雑誌『ニュートン』が、日本ではじめての一般向けの科学ジャーナリズム誌として登場したことは、このような学習

の成果のひとつでもあった。やや極端に言えば、『日本沈没』の貢献によって、今や日本人の多くが、「フィリピン海プレートがユーラシアプレートの下にもぐり込む」といったかなり専門的なことばを理解し、それを前提として、地震防災について意見を述べ、そのあり方についての相互「批評」に参加することが可能となったのである。

これに対して、先にも触れたネット上でのやり取りのように、相互「批評」が、専門的知識の裏づけのない単なる個人的な好悪の表現にとどまっている場合も多い。この点で東大の教養教育でのジャズ史についての講義の経験を踏まえた作曲家の菊池成孔の発言は興味深い。彼によれば、音楽をはじめとする文化消費の場面で、「薬理的消費」とでも呼ぶべきものが目立っている。例えば、疲れたときにはこの音楽、元気をもらいたいときにはこの音楽といった「〇〇が〇〇に効く」という表現の多用である¹⁷。そしてこのようなスタンスからのネット上での「批評」的言語は過剰と言ってよいほど満ちあふれており、「これはすごい」という手放しの絶賛から、「使えねー」といった一刀両断までのあらゆるスペクトルのものがあるというのである。しかしこれらはいずれも例えばジャズならジャズという音楽のジャンルのなかで、その理論や演奏法などについてどのような歴史的展開があったのかを踏まえた客観的「批評」とは言えない。彼が東大で、学生に数多くのジャズの演奏を聴かせながら、パークリーメソッドの確立を軸とするジャズ史について講義したのは、音楽についての専門的知識と「日々のこと」としての音楽の消費とを結びつけることによって、学生たちに「外部的視座」に基づく「批評」のことばを身につけてもらいたかったからであった¹⁸。もちろん菊池は、自分自身が語るジャズ史もまた一種の「擬史」にすぎず、それ自体が相互「批評」の対象となるものであることを認める。しかし戸坂の言う「暇つぶし」「退屈しのぎ」としての文化消費の現代版であるこの「薬理的消費」に基づく「批評」のことばを越えて、批判的・反省的な「ジャーナリスティックな語り」に到達するためには、少なくとも一旦は、菊池が提供しようとしたような意味での

専門的知識の媒介が必要となるのである。

6 「学びのキャリア」について語ること

「日々のこと」と専門的知識の分離が、大学生活のなかで最も集約的な形で表れる場として、学生たちの就職活動をあげることができる。大学での学びと卒業後の職業生活の関係についてのすぐれた分析となっている日本学術会議のレポートの表現を借りれば、「最後まで『仕事』の内容について明確なイメージを持つことができないまま、目を閉じて深淵を飛び越えるが如くに特定の『会社』に就職する」学生は決して少なくない¹⁹。学生たちにとって最も重要な「日々のこと」であるはずの卒業後の職業生活が、彼／彼女たちが学ぶそれぞれの専門分野と具体的にどのように結びついているのかについて語られる機会が、大学教育には決定的に不足している。もちろん昨今の就職難もあって、どの大学においても狭い意味での「就活支援」の充実は著しい。しかしそれらは、「就職活動に役立つスキルの形成やノウハウの伝授、資格取得の促進といったことに取り組みが集中してしまう傾向」をもっている。「本来、大学におけるキャリアガイダンスは、大学の教育課程全体が専門性の形成や職業上の意義を高め、学生の専門的・職業的能力を育成する教育力を強めることと相携えて行われるべきもの」であり、「就職対策的なキャリアガイダンスを独り歩きさせても、それは却って学生達を浮き足だたせ、追いつめる結果にもなりかねない」のである²⁰。

学生達はエントリーシートを書くことを強いられることを通じて、大学生活のなかではじめて、「日々のこと」としての将来の職業生活と自らが学んできた専門的知識の結びつきについて「ジャーナリストティックに語る」ことを求められて当惑する。「大学では何を勉強してるの?」という面接での質問に「経済学とか(!)をやってます」と答えて口ごもるしかない学生もいるのである。大学における肯定的に語るができる経験が、サークルやボランティア、アルバイトなどの課外活動に限られてしまったり、自らの学びと関わるものとしては、フィールドワークや実習などの「直接的経験」しかあげら

れない場合も多い。逆に大学の教員の側の学生の就職活動についての典型的反応は、「自分は民間企業に就職したことも、就職活動をしたこともないのだから、そんなことについて語る資格も能力もない。自分の仕事は自分がやってきた専門分野について教えることであって、その教育内容と学生の職業生活の関係についてなど考える必要はない」というものである。むしろ学問を「職業生活との接続」という観点から評価しようとすること自体が、専門的分野について体系的に学ぶことを求める学問の論理をゆがめるものであり、学生の側に「自分の卒業後の生活とは関係ないからこんなことまで勉強しなくてもよい」という間違った甘えを引き起こすことになるという主張すらある。

学生たちが、「私たちは大学でこんなに面白くて意義のあることを勉強してきたんです」と、自らの学んだ専門分野と大学外の人々とも共有することのできる「日々のこと」とを結びつけて、目を輝かせて生き生きと「ジャーナリストティック」に語る事ができれば、彼／彼女たちが、エントリーシートを書くことに感じる困難はかなり減るはずである。このように自分自身の「学びのキャリア」について積極的に語ることに不自由を感じる学生を生み出してきたのは、結局「この専門分野はこんなに面白くて意義のある分野なんだよ」ということを、学生たちにとっての「日々のこと」とのつながりにおいて語ることを怠ってきた大学における専門家主義である。学生たちが大学の授業の多くを、「何のためにこんなことを勉強しているのかわからない」などと考えることのないように、ひとつ一つの授業について、そして授業相互を結びつけることによって何が得られるのかについて、教員と学生の双方が「ジャーナリストティックな語り」を共有することが、大学教育に今、最も求められているのである。

注

- 1 Russell Jacoby, *The Last Intellectuals*, New York, The Noonday Press, 1989, p.19.
- 2 *ibid.*, p.14.
- 3 *ibid.*

- 4 広重 徹「第2章 科学の制度化」、『科学の社会史』、中央公論社、1973年。
- 5 同書、pp.328-331。
- 6 マーチン・トロウ『高学歴社会の大学』、東京大学出版会、1976年、pp.28-37。
- 7 渡辺 裕『聴衆の誕生』、春秋社、1989年。
- 8 トロウ、前掲書、p.64。
- 9 同書、pp.31-33。
- 10 エドワード・サイード『知識人とは何か』、平凡社、1995年、pp.111-117。
- 11 同書、pp.125-126。
- 12 同書、p.120。
- 13 ダニエル・ベル『イデオロギーの終焉』、東京創元社、1969年、p.10。
- 14 以下の戸坂の大衆文化論については、下記論文参照。池田 成一「戸坂潤における『文学』の意味をめぐって」、『唯物論研究年誌』、第5号、青木書店、2000年所収。
- 15 この点については、下記拙稿参照。「歴史構築主義から歴史批評へ」、『唯物論研究年誌』、第8号、青木書店、2003年所収。
- 16 『日本沈没』の占める重要な位置については、下記論文参照。小山 真人「映画・小説・テーマパークで学ぶ地震と火山」、『SABO』、vol.89、2007年1月所収。
- 17 菊池 成孔+大谷 能生『東京大学のアルバートアイラー／ジャズ講義録・歴史編』、メディア総合研究所、2005年、pp.262-263。
- 18 同書、pp.244-245。
- 19 日本学術会議『回答／大学教育の分野別質保証の在り方について』、2010年7月22日、p.51。
- 20 同書、p.58。